



杵築市について

活動組織のある杵築市は、大分県国東半島の南東部に位置する。市内には、杵築城と城下町が残されており、現在、国内外から多くの観光客がやってくる。

市の東側は伊予灘、南側は別府湾に面しており、船びき網や底びき網など多様な漁業が営まれている。



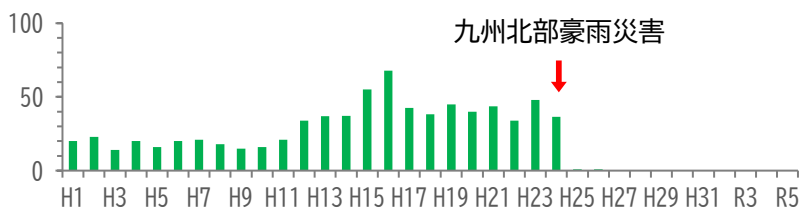
守江湾の現況

杵築市の南東部には、守江湾と呼ばれる小さな湾があり、カキ養殖、小型定置網やナマコこぎなどが営まれている。また、湾奥には、八坂川や高山川などによって形成された河口・前浜干潟が広がっており、アサリ漁が営まれたり、多くの市民が潮干狩りを楽しんだりしていた。

平成 24 年 7 月九州北部豪雨災害が起きた。市内でもがけ崩れなどの被害が生じた。湾奥の干潟でも、大量の土砂が堆積し、それ以降、アサリ資源が激減し、漁獲サイズの個体はほぼ認められなくなった。

アサリ資源の激減により、潮干狩りも平成 27 年から原則禁止となり、干潟の漁業および春の風物詩であった潮干狩りの復活を図ることを目的とする、アサリ資源の回復が喫緊の課題となった。

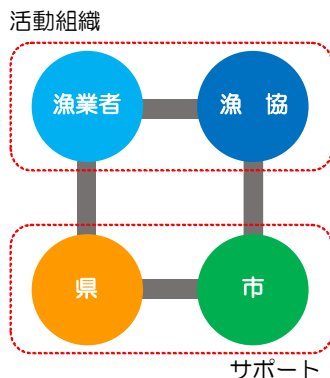
アサリ漁獲量(ton)



組織の設立および活動方針

杵築市では、九州北部豪雨前の平成 23 年から、市の単独事業で漁業者と一緒に稚貝の分散放流やケアシェルなどの網袋を活用した稚貝確保の取組を進めてきた。

しかし、これら取組だけでは激減したアサリ資源の回復が図れず、29年度から被覆網を活用した母貝団地づくりも併せ行った。また、令和 4 年度からは、こうした活動の中・長期的に継続させるために、「守江湾干潟保全の会」を設立し、水産多面的機能発揮対策事業の支援を受け、取組を展開することにした。



● 活動方針

母貝団地の造成	被覆網や網袋を設置し、母貝に育て、保護する
母貝団地の維持・管理	被覆網等のメンテ、稚貝の補充、アサリの間引き
腹足類の除去	ツメタガイやアカニシ等の除去

アサリ資源の回復を目指して

(1) 母貝団地づくり

守江湾では、現在、アサリ稚貝が干潟に着底しても、ナルトビエイやクロダイ等によってほとんど捕食される。そこで、被覆網や網袋を活用した母貝団地を造成し、アサリの産卵・稚貝発生量の増加を図っている。

被覆網は、主に幅 2m×長さ 25m・目合 9mm 角のラッセル防風網を、干潟にフロートを付けずベタ張りするやり方で設置している。

網袋は、大きさ 59cm×60cm・目合約 5mm 角のラッセル網袋に砂利(細目) 5リットルを入れ、設置している。

被覆網内の母貝の増殖は、天然稚貝の集積だけでなく、造成時に殻長 1.5mm のアサリ人工種苗を各網に 50 万個程度放流したり、後述の稚貝の追加補充を行う。一方、網袋は、天然稚貝の集積のみで賄っている。

(2) 母貝団地の維持・管理

母貝団地の維持・管理として、①被覆網や網袋のメンテナンス、②被覆網区画への稚貝の補充、③間引き(密度管理)を行っている。

①では、網の点検や補修、交換を実施。被覆網の交換は、原則年 1 回。網袋の交換は、3 年に 1 回。また、網袋の交換時には、袋内のアサリを選別し、母貝はアサリの生息密度が少ない被覆網区画に放流し、若齢貝は交換した袋に再度入れるようにしている。

②では、広島県で技術の確立が図られた網袋を活用した大野方式による稚貝確保を行い、被覆網区画に追加放流している。

③では、アサリの生息が過密な被覆網区画において殻長 30mm 以上のアサリの間引き、低密度の区画に放流する取組を実施している。

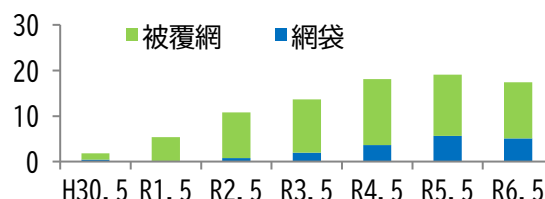


活動の成果と課題

アサリ資源の回復を目的に、母貝団地づくりを中心とした取組を展開してきた。その結果、団地内におけるアサリ現存量は、区画の増加やアサリの成長にともない、現在、20 トン弱まで増加した。しかし、団地外のアサリ生息密度は、団地内の 1/4 程度と少なく、湾全体におけるアサリ資源の回復には至っておらず、活動の継続が求められる。

現在、母貝団地のメンテナンスに労力を要しており、十分に維持管理できていない。今後、地域の子どもたちや住民等への啓発活動を兼ねた体験会の開催などを通し、人材の育成、確保を図っていきたい。

母貝団地におけるアサリ現存量(ton)



アサリ密度(個/m²)

